

2015年2月8日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 21 章 20～28 節

説教：贖いの日

1 報復の日

1) 滅亡が近づく

日本では、これまで過去何度か「人類滅亡の日」というような話題がブームになったことがあります。いまもいろいろな説が飛び交っていて、人々の心の中にある漠然とした不安を反映しています。

イエスははっきりと、「この天地は滅び去ります」と言われました。ただし、それがいつであるかということについては、父なる神のほかは誰もわからないと釘を刺しました。ただ、滅亡の日は突然来る訳ではありません。必ず前兆があります。そのしるしを見たなら、もうこの世界は終わりの日に近づいているのだと悟ることになります。

どんな前兆があるのか、ここにいくつか具体的なことが書かれています。まずエルサレムが軍隊に囲まれ、異邦人に踏み荒らされるとあります。また、日と月と星に前兆が現れ、天の万象が揺り動かされるともあります。聖書の言っていることは、まったく絵空事には聞こえません。世界が抱えている問題がこのまま行ったら、イエスが語ったとおりになるかもしれない。多くの方は感じると思います。

神はどうされるのでしょうか。いつも繰り返しますが、神は私たちが愛していると言われます。愛しているのならば、私たちが滅びることのないように、守ってくださるはずではないですか。滅亡の日がやってくると知っているのなら、止めるべきではないでしょうか。ところが、23節で、「その日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です」と語っ

て、まるで他人事のように知らん顔をしているように感じてしまいます。もちろん、知らん顔をしているはずはありません。ではどうしようというのか。これから見て参ります。

2) 御怒りが臨む

それを考える前に、なぜこの世界は滅びていくのか。その原因から見ておきます。最初から不完全な世界であったのなら滅びる、壊れるということはしようがないでしょう。でも、神はこの世界を完全なものとしてお造りになったのです。滅びることなど本当はありえなかったのです。それが滅びるものとなってしまった。原因は、私たちの先祖であるアダムとエバにあります。彼らは神に対して背き、罪を犯した日以来、この世界は汚れてしまいました。神は何度も悔い改めるようにと語るのですが、人々は耳を貸そうとしません。神は間違ったことをそのままにしておく方ではありません。いつか必ず正そうとします。

日本にはかつて「水戸黄門」という国民的な人気を博したテレビドラマがありました。悪代官が、正直に生きている人を苦しめ、不正な富を手に入れている。それを知った水戸黄門が最後に登場して、悪代官をさばき、貧しい者を救っていく。いつもワンパターンの筋書きなのですが、なぜか人気がありました。悪い者はいつまでもそのままではおかれな。悪い者は必ずさばかれる。そういうメッセージに人々は強く引かれるのでしょうか。そのように見ると「水戸黄門」は実に聖書的な内容だとも言えます。

けれども聖書とは違う所もあります。「水戸黄門」では、黄門様が身分を明かして悪代官がさばかれ、ハッピーエンドとなります。しかし、聖書ではさばきの日を、神の御怒りの日とか、報復の日と言って恐ろしいことが起きると言うのです。26節に、「人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います」とあります。報復の日、さばかれるのは悪い者だけでいいはずですが、ところが、全員が巻き込まれてしまう。それではなんのためのさばきなのでしょう。結局、全員滅んでしまう。いったい信じる意味はどこにあるのでしょうか。

2 贖いの日

1) 人の子が来る

一瞬がっかりしてしまいますが、イエスは最後の日について、もう一つのことを約束してください。27, 28節。「そのとき、人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。これらのことが起こり始めたなら、からだをまっすぐにし、頭を上になげなさい。贖いの日が近づいたのです。」

御怒りの日、報復の日は同時に贖い日でもあります。信じている者が救われていく。天に上げられていく日。私たちは主の祈りの中で、「御国が来ますように」と祈っていますが、その祈りが現実となる日とも言つてよいでしょう。その日、ここでは人の子と呼んでおられますが、イエス・キリストが天から栄光を帯びて降りて来られます。今は、この方を見ることはできませんが、この贖いの日に、私たちは主の御顔を仰ぎ見ることになりま

2) 頭を上になげなさい

とは言え、その贖いの日がすぐに来る訳ではありません。しばらくの間、恐ろしさのあまり気を失うほどの苦しみを通らなくてはなりません。どうしてそんな所を通らなければならぬのでしょうか。さばかれる人と救われる人とをきちんと区別して、信じる者が苦しみに会わないようにしてくださる、それが神の愛というものではないか。

そんな文句を言いたくなるのですが、残念ながらそうはいかないようです。むしろキリストを信じているがゆえに、迫害に遭い、裏切られ、殺される者も出てきます。しかしイエスは、たとえ苦しみに会ったとしても気落ちすることがないようにと、からだをまっすぐにし、頭を上になげなさいと言われます。

実際にそのようにした人がいました。使徒の働き7章に登場するステパノです。彼は、キリストを証したために裁判にかけられ、結局は石で打たれ、弟子たちの中で最初の殉教者となります。その最期の時、彼は天を見つめ「主よ。この罪を彼らに負わせないでください」と言って、眠りについた、つまり死んだと聖書に書かれています。

ステパノはそうだったかもしれない。でも私はそんな目にあいたくない。正直にそう思います。そもそも、どうして苦しみにあわなければならないのか。そこがどうしても納得できません。苦しみに襲われる時、神は何をしているのか、と誰もが疑問を持ち、神に文句をぶつけたくなります。神は本当に何もしていなかったのでしょうか。

3 十字架に示される二つの意味

1) 報復：さばき

主が私たちに、「あなたがたは苦しみにあります」と語る時、主だけが私たちから離れて安全な所に立って語ることはありません。私たちが苦しみにあうと語る時、主は私たちよりも先に、そして私たちよりもっとひどい苦しみに会うことを決めているのです。それが十字架です。このように見てくると、十字架には二つの意味があることに気がつきます。

十字架は、罪に対する神の御怒り、報復を示しています。それが一つ目の意味です。神は、必ずさばきをなさる。決して罪や不正を見逃す方ではない。そのことを私たちの目にはっきりと見えるように立てられたのが十字架です。その十字架で、神のひとり子がさばきをお受けになりました。なぜ、罪のない方がどうしてさばきを受けるのですか。本当は私たちがあの十字架につるされなければならなかったのです。神が、私たちの身代わりとなられたからでしょう。

ところが私たちはなんとやっているか。ちょっとでも苦しいことがあると、すぐに文句を言います。「神は何もしてくれない。神は私のことを忘れて見捨ててしまった。神を信じてきたのに、どうして私はこんな苦しみに会わなければならないのか。」

でもよく考えると、納得できないと言う権利があるのは神の方ではないですか。いったいどうして神が十字架につるされ、苦しみを受けなければならないのか。納得できる説明はありません。変な言い方ですが、こんな理不尽な話はありません。

信仰者が苦しみに会うのはなぜか。多くの人がいろいろな説明を試みましたが、私の知る限り納得のいく説明を聞いたことはありません。しかしもっと説明できないのは、主

が私たちよりの先に、もっとも残酷な苦しみを受けられたことではないですか。説明はできないけれども、ただ言えるのは、私たちが苦しみあう時、主も苦しみを共にして下さっている。そのようにして私たちのそばに寄り添おうとされている。そのようにして私たちの主となってくださいました。

2) 贖い：救い

十字架が示す二つ目の意味を見ます。28節に「贖いが近づいたのです」とあります。十字架は贖い、救いを現します。主が十字架で死なれ墓に葬られてから三日目に主は墓からよみがえられ、天に昇られました。なぜ天に昇るのでしょうか。目的があったのです。「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」(ヨハネ 14章 2, 3節)

このことばは本当でしょうか。本当に私たちの住まいが天に用意されているのでしょうか。疑いたくなるのは当然です。もし約束が嘘だったら私たちは実にむなしいものを信じていたことになります。でも、主は十字架で苦しみを受けられたのではないですか。いのちを捨ててくださったのではないですか。いのちを捨てて嘘を言うのでしょうか。この方がいのちを捨ててくださったと言うのなら、やがて私たちが迎えに来てくださるという約束も本当だと言うことにならないのでしょうか。

事実ステパノは死の間際にこう証言しま

した。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」(使徒7章56節)

私たちは地上の生涯の最期を迎える時、どこを見るのでしょうか。多くの方は死んだらどこに行くのだろうかと不安になり、下を向いてしまいます。でも私たちは、上を見上げることができます。そこに何が見えるでしょうか。主イエスが神の右に立っておられる姿があります。この方が、死に臨む私たちの霊を受けとめてくださいます。